

なぜ「死の教育」なのか

佐司和晃

一

その結論

死の教育とは、死を真摯にせよ教育である。

そのゴクヤクは、つねの三原則に従う。

これをすなわち、「なぜ」の教育からへの結論である。

① 世渡りが浅くしくなる。

② 死の文化の多さがよくわかる。

③ 生きることの深味と厚味ができる。

三 哀づけとなるさびなる理由

(1) 通過儀礼のとき、自然なる「死の教養」が薄手になつてきていること。

(2) 意識の発生と振舞の推理力をもつ人間が、「死」の自覚となり宿命を背負つていくこと。

(3) 死を見ないよう、死にふれないう、死をかくして避道する。また死をいまわしいものたしてきた故だ。

- ① 死を替りて「タブー」にするな。
- ② 今までは、縁起でもない、とさうぶうた、敬遠しつつ、近づくのを避け避けてきた……
- ③ 死を「ふつう」にする。「ふつう」の形にもつていく。
- ④ ケア近せば、これまでの「タブー」のたたかひ。つまり、その不審入へ。
- ⑤ 死をいみじうらう風習。死ぬことをあきらめたまはなすた、ミヤコイリとか、ミカクシとか、トロシマヘタバコカイニイタとかの隠語を使うこと。「死ぬに腐食のよき母を日常を生活で使わせなさい」と。死者に代わつた子、さの敵に近づくとケガレルとかいうこと。また、死者の家の前を通るときは、目をつぶつて通水とかいうこと。
- ⑥ とどのつまり、死ぬことを、もつとサバサバと。あたりにまいた、さしてナイナイだ、すなわち尊敬を亡めず、つとあつて来たかということ、である。

(4) 「死しながら生きて」「生しながら死ぬ」故だ。

(5) 人前ではどうにもならぬことに出会ったときだ。どう死して行くか、「ふだんから」見出して置くこと。

① すなわち、訓練しておくこと。

② 未だ死しておくこと。

③ 唱えよ。(トナエゴト)ーナムカンゼオンボサツ。ロツコンシヨウシヨウ。ナムサンボウ。マン
ジャラクマンジャラク。クワバラクワバラ。アビラウケンソツアカ。ナムキエツナムキエホウナムキ
エンウ。ナムアメダツ。ナンマイダ。ナムシヨウホウレンダキヨウ。テンニマシマスカシヨ。ワレ
ラシヨヨ。甘き。トモにしておくこと。個性的な創造してもよい。

④ そのいどく、イザアというときの、走らななものを、各人のため。

(6) さらに「直せば、」昔のとき「神頼み」の方法論を常平平全から人海へと
しておくべく。

① かながが、あつかわがらぬ故だ。

② 航空機事故、癌の宣告や、大地震の発生……どうも「イザア」というとき「死」の

キヤウシが、大ゆである故だ。

③ ナツキの心とく、ふたんかどう「アビラマ」をケンワカシ。とかの唱えよるに慣れさせておくこと。癖として身につけておこなふこと。

④ 自分の方がどうにもならぬときの方法論。つまり精神づくりを自己訓練として、しかしと身にまはせぬこと。せよせよおこなふこと。

⑤ さういふとき、「俺はこれとゆく」のありき、つまり決意をさせておこなふこと。

(7) 以上のごとく、死をかうたに。あたりにまえた、見つかせていきたいためた。

① 知性的にも。

② 魔性的にも。

(8) 老い、病気、死期、これをきこつただけ明日く迎えてゆけるようにしたのがためた。

(9) 死は想像力や空想力発現の無限なる世界、そして好奇心の究極の対象とする価値がある故だ。

(10) 「死しをめぐむる文化は、宗教の世界を理解するための、よき手引き」と称しつる故だ。

① 宗教入門、なりして宗教入門への恰好の機縁にもなる。

② キヤウシの唱えよる。たゞの死し方がたが、それはタノシイ時、ウレシイ時にも役だ立つ。

(11) 精神づくり論の一大ポイントでもあるためだ。

(12) 死を正しく認識させよう。

- ① 科学的だ。(生物学的、心理学的)
- ② 弁証法的だ。(生と死、表と裏)
- ③ 宗教学的だ。(神教の中の真実)
- ④ 民俗学的だ。(しきたりの中の真実)
- ⑤ つまり、「死」とは何なのか。

「精神修行事始めのまじ。ませつしせん。とくべつごちまう。うれしき。たのしき。舞々々。行事のありようのふえ個性やバカくささ。だが、たつ手まどうごいふとも。(精神修行先程様がおまごころとらう神教磨)

付言

① 死の教育においては、あせり必要なし。急ぐ必要もなし。

と、理論と方法を、じっくりと押し進めたい。

② 「歳月は慈念をきまじらず日」待てば海路の日和オリの行き方ぞ...

墓の五味要るさ。脳死のこと。瘞り宣まろり尙道。臓器移植。お母の教

布衣その他、時の推移をわけつつ、相府に明日く遊みつつある。やはり、今この「歳月
は多き衆心をすすむ」と物事を、世をみま運んごかたい。(その反面の「歳月人を待た
ずして待てど世春らせ」としり大即ちまもたおれぬことなく。)

回

死の教育は、早之延ンダオガイイ、という教育とはない。死ニ急キのすすめとはないの
だ。死という事々夫と、過不足なく、つきあつてゆき、たいりである。いのは親とんごま
たいのだ。

年

通温儀礼へ全儀礼・中儀礼の見直し、伝統文化のよさを発見すべく。

(一九九五・二・十二—六・三十一)

(同・七七、全画所創会を提議)